

# 「釈尊伝の研究」と私の仏教学

——退職するにあたって——

森 章 司

## はじめに

今まで定年退職された先生方には、最終講義のなかでご自分の学問について語っていただき、後進の参考にさせていただきたいとお願いしてきた。私の退職は我俣を許していただけたおかげの「依願退職」であって、来年も非常勤講師をやらせていただくことになっているから最終講義はやらない。しかし今までこの我俣の理由を十分にご理解いただけるように弁明できていなかったように感じられもするし、私のやって来たことを恥を忍んで書いておくことも、反面教師という言葉もあるのであるから何らかの参考になりうるであろうと考えて、この機会に私の学問の一端を語らせていただくことにした。

## 釈尊伝の研究

格好すぎるかも知れないが、私が退職するのは、今わたしが精魂を傾けてやっている「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」（以下「釈尊伝の研究」）を、元気なうちになんとかして完成させたいからである。この研究は、数名の私の教え子に協力を仰ぎ、中央学術研究所という研究所の補助を得て、原始仏教聖典を材料にして、その編集者たちがイメージしていたであろう釈尊の生涯を再構築しようとするものであって、これを始めたのは平成六年の一月のことであるから、すでに一三年を経過したことになる。

この研究の最終目的は「原始仏教聖典をもとにした釈尊の伝記」を書き、聖典をその伝記による時系列にしたがつて配列した目録を編集することであるが、この作業はおおまかに四段階に分かれる。第一段階は漢・パにわたる経蔵・律蔵からデータを収集してパソコンに入力することであり、第二段階は釈尊の伝記に直接には関わりがないけれども、その前提として解決しておかなければならない事項を研究することであって、例えば古代インドの暦とか年齢の数え方、あるいは釈尊時代の出家沙門の生活のあり方などの研究である。第三段階は釈尊の伝記のメルクマールとなるべき主要な事項の年代推定であって、釈尊の息男のラーフラの出家年とか、祇園精舎の建設年、比丘尼の誕生年などである。その後に第四段階として、以上の研究をもとにしてさまざまエピソードを釈尊の生涯に当て嵌め、先後関係を決定する最終作業に入ることになる。これが終われば、釈尊の伝記と「聖典目録」の骨格はおのずからにでき上がることになる。

そして現在は第二段階の作業を残しつつ、第三段階に入っているとある。釈尊の生涯に関するかなり具体

的なイメージができあがりつつあるけれども、まだまだ最終段階には至らない。今までの研究成果については、「中央学術研究所紀要モノグラフ篇」として『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』を一一冊刊行しているので、これをご参照願えれば幸いである。

なぜ今さら、釈尊の伝記などという古くさいテーマの研究を始めたのかという疑問を持たれるかも知れないが、今までに国の内外において多くの釈尊の伝記が書かれているけれども、実はひとつとして成道から入滅までの釈尊の行状を完全に描いたものはない、要するにまだ釈尊の伝記はよくわかっていないからである。周知のように原始仏教聖典は、建前としてはいわば釈尊の言行録として編集されたものであるけれども、そのすべてが「一時」で処理されてしまっているのです、それが「いつ」のものであるかを特定できない。しかし成道直後と入滅の際の模様を描く聖典のみは、その「いつ」に紛れがないから、たくさんある「仏伝経典」はこれらを材料にして作られた、いわばお手軽な不完全きわまりないものなのである。

しかし「一時」とはされているけれども、注意深く読めば聖典の中には、それがいつのものであるかを特定する材料となるたくさんの方が含まれている。なぜならそこにはたくさんの方が登場し、その舞台となった場所、説かれた法や律の内容などが事細かに記されているからである。例えばある経典にある比丘が登場しているとする、この比丘の在家時代のことを描く経典はそれよりも前のことになり、またこの比丘の和尚が誰かわかれば、その和尚の出家はこの比丘よりも早いことになり、さらにこの和尚の事績は他の比丘の事績とも係わり、その間に例えば祇園精舎の建設がからむとすれば、祇園精舎の建設年がわかりさえすればかなりの精度で年代を特定することも可能となる、という具合である。このようにして膨大な原始仏教聖典に残された網の目のようからみあう一つ一つの情報をコンピュータに入力し、これらを整理・分析すればかなりのことがわかってくるはずだというのが、

われわれの研究方法である。現実になれわれはこのような方法ですでに、摩訶迦葉、摩訶波闍波提、阿難、提婆達多、波斯匿王の事績を調査して、それを論文として発表してきた。これが先に書いた第三段階の研究である。

もちろん原始仏教聖典の中には、互いに矛盾する情報が数限りなく含まれている。これらをどのように取舍選択するかということも大きな問題であるが、これについては前述の「研究報告書」の第一号に掲載した「目的と方法論」に書いたように、まず資料を次のような水準に分け、上位の水準資料を優先させるといふ原則を取っている。なおここで「資料」というのは、釈尊の生涯や教団に係わる一つ一つのエピソードのことである。

「第一次水準資料」はパ・漢共通する資料

「第二次水準資料」はパーリ聖典資料で漢訳資料とは共通しないもの、すなわちパーリ聖典のみが伝える資料

「第三次水準資料」はパーリとは共通しない漢訳聖典独自の資料

「第四次水準資料」は上記聖典に付されたアッタカターや、後の時代に成立した「仏伝経典」などの古伝承

要するに、まず第一にはパーリと漢訳の原始聖典の編集者たちが共通して持っていた釈尊の生涯に関するイメージを尊重するということであつて、これは特殊な伝承は避けて、できるだけ平均的・標準的な伝承に基づくということの意味する。次にはパーリの編集者のイメージを尊重するということである。漢訳聖典は複数の部派が伝えたものであつて、だから編集者のイメージが互いに齟齬する可能性がないではないが、パーリはそれよりも単色で、そのイメージを再現しやすいであろうという理由である。なお以上は、今までの原始聖典の使い方の主流が、一つの文献の成立時期の早いものを尊重するという姿勢であつたのに対して、われわれは現在に伝わる原始聖典の全体を等分に見るといふ姿勢を取っているということも示す。要するに現在に伝えられる原始仏教聖典に点描されている釈尊の生涯のエピソードの最大公約数を、時系列にしたがつてまとめたいということである。

しかしそれでもなお細かな点について矛盾する資料が出てきて、上記のような方法論では結論が出ないということも避けられない。その時には、できるだけ合理的に整合性が取れるように資料を修正せざるを得ないということがありうる。それは今までに報告してきた摩訶迦葉などの伝記研究でもやってきたことであるが、これからさらに作業が進むと、これらの研究の結果そのものを修正しなければならないということも生じてくるに違いないと覚悟している。研究途中であるに拘わらず「報告書」を刊行しているのも、最後の最後になってそういうことが生じるといけないので、もし間違ったところがあればそれをご教示いただいで、できるだけ早期に修正したいがためである。

またわれわれは単に釈尊の事績が時系列にしたがつて配列できれば、それで事足りるとは考えていない。できればその伝記は釈尊と仏弟子たちによって形成されたサンガの営みとして、その中でどのような生活がなされていたかという生活実感の伴ったものでなければならぬと考えている。また実際にこういうことがわからなければ、釈尊の伝記は描けない。經典では釈尊は王舎城から舎衛城に遊行されたなどと簡単に書かれているけれども、それがどのような気候の時で、どのようなルートを、どのような交通手段を使って、どのくらいの日数をかけ、どのように遊行されたのかというようなことがわからなければ、我々が考えている「伝記」にはならないということである。いわばこれが第2段階の研究であって、本紀要に掲載させていただいた「『現前サンガ』と『四方サンガ』」もこうした研究成果の一端である。また「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」とか、釈尊の雨安居地の研究などを「報告書」に報告してきたが、これらもこの段階の研究に属する。

このようにこの研究はかなりの大風呂敷を拡げたものであって、しかも原始聖典から釈尊の伝記を再現するなどできるわけがないという風評を耳にしないうちはなかった。しかし前記のような報告書を発表し続けてきて、これが

もう一冊を数えるまでになつていたので、いくらかは評価も違つてきているのではないかと勝手に推測している。もちろんこのような心配は当事者である私たちが一番強く感じていたことであるが、今までに行つてきた作業から、その全体を発表できる時期はそう遠くないという実感を強めている。

歴史的事実を発見しようというのではなく、原始仏教聖典の編集者が持つていたであろう釈尊の生涯イメージを再構築するということを当面の目的としているので、むしろ意識的に仏教以外の文献資料を排除するという方針をとる偏つた研究であるから、基本的な欠陥があるという批判は覚悟の上であるが、ともかくパ・漢にわたる原始仏教聖典をまるごと材料とするという大ざっぱな研究姿勢はいかにも私らしいといえるかも知れない。もつとも赤沼智善や中村元という偉大な先人たちは、こういう作業をなされたうえで、さらに仏教以外の文献をも博搜されているのであるから、私ごときがそれに付け加えることができるとしてもほんのわずかのものであるうが、ありがたいことに今は幸いコンピュータ時代になつて、資料の効率的利用と精度は格段に上がつてはらずであつて、その恩恵を被つてこそその体系的研究ということもできる。

## 『仏教教理の研究』その他

このようなおおざっぱな研究方法は、私の身に染みついたものであるらしい。私が東洋大学から博士（文学）の学位をいただいた『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』（東京堂出版 一九九五年三月三〇日）もそういう傾向の研究であつて、これは主にパ・漢にわたる経蔵の全部を読んで、四諦や縁起や無常・苦・無我などの基本教理に関する情報を、ひとつも見逃さないようにという意気込みで網羅的にカードをとつて、それを整理したもの

が土台になっている。今の時代であれば、電子データによって簡単に検索もできるから、もっと簡便な作業方法があったに違いないけれども、ばか正直に一枚一枚膨大なカードをとったのである。しかし電子データによって資料を集めるのと、一ページづつ丹念に読んでカードに取るのとは、文献の咀嚼の程度は格段に違うであろう。

そしてこの書物の第一章の「資料観」で述べたように、「原始経典と称されるパーリニカーヤ・漢訳阿含の全体を対象として、厳密な態度で資料を収集し、これを客観的な態度で分析するという作業を通じて、その最大公約数こそが原始仏教の教えである」とする姿勢でこれを分析したのであって、この方法論が今の「釈尊伝の研究」にながっていることはいうまでもない。もちろん原始仏教聖典のすべてを限られた時間の中で読むためには、パーリ語や漢訳の原文そのものをじかに読むということはできない。そのためにはさまざまな和訳のお世話になった。これは私の語学力が不足していたからであるが、特殊を棄てた最大公約数こそが真実を反映しているという資料観からすれば、必ずしも原典にこだわらなければならないということはないと考えているからである。

この研究について、学科が私の博士号取得のお祝いの会を開いてくれたときに、次のようなことを話させていただいた。「私はいつまでたってもプロの仏教学者という自覚よりは、素人の仏教愛好家という感覚の方が強い」「したがって、私には今まで誰もやらなかった資料を発掘したいという気持はなく、むしろ今までこれが仏教だと捉えられてきた、ありきたりの文献があれば充分」「私には註釈者がどう書いているか、先学の学説がどうかなどということには、あまり注意をしないという傾向がある。むしろ根本となる文献そのものから、私が何をどのように学び取るか、汲み取るかということに主眼があった」「東大名譽教授の早島鏡正先生とお話しをさせていただく機会があつて、今の若い原始仏教の研究をする学者は、あまり先輩の説にこだわらない、いわば思想的な研究をしていて、君はその走りだ、という話しを聞いた。私は鈍感であるから、今考えてみると、ひよっとするとそれは皮肉だ

ったという気もしないではないが、そのときには評価してくださっているものとして聞いていた。もしほんとうに評価できるようなものであるとするならば、それは素人仏教学研究家としての怪我の巧妙だったのではないかと思う」というようなことである。そうでなければ確かに、さんざん研究されつくされてきた無我とか縁起とか四諦などというものを、今更やってみようという気持ちは起きなかつたであろう。そういう意味では「釈尊伝の研究」も同じである。

このようにそもそも私は仏教学のプロではなく、いかに生きるべきかなどという青臭いものが問題意識の根底にあった。しかしそれが修行などの実践に向かわなかつたのは、性格として観念的な原理原則を棄てられないタイプだったからであろう。極めて現実的なものであるはずの律藏を研究するにあたっては、律藏には経藏とは異なる独自の理念・思想があるはずだということから出発しているので、東洋大学井上円了記念研究助成を受けて刊行させていただいた『初期仏教団の運営理念と実際』（国書刊行会 平成一二年一二月二〇日）も、当初は『律藏の思想』であつたのが出版社の意向でこうなつたのである。

そして、私の初めての編著書の『仏教比喻例話辞典』（東京堂出版 一九八七年六月二〇日。のち「見出し語索引」をつけ若干の校正をして、国書刊行会 二〇〇五年六月二〇日）もこういう種類の作業であつた。これは何人かの同志に手伝ってもらつて、二四三部三四六五巻におよぶ漢訳経論をじかに読んで、そこに書かれている「直喻」を中心にした比喻の資料を収集したものが元になっている。これも大ざっぱといえば大ざっぱに、できるだけ多くの漢訳経論から比喻を収集して、これを整理しようとしたものであつて、その方法論においては上記の研究に同じい。それだからであろうか、私の学位論文よりもこちらの方を業績として高くかつてくれている学者もあるくらいである。

## 会社時代に学んだこと

おそらくこうした特殊は避けて、一般的な資料をできるだけ幅広くつかって、大きな視点から大づかみにするという、私のよいか悪いのかわからないが、私の仏教学研究の方法論の土台を作ってくれたのは、私の会社時代の経験であると思う。

私は両親を戦争で早くに失ったことがあって祖父母に育てられたので、高校を卒業するとすぐに日本碍子（現在は「日本ガイシ」）という会社に就職した。昭和三年のことである。電気は送電線を伝わって発電所から町までやってくるが、鉄塔からその送電線をぶら下げている白い瀬戸物の絶縁体が碍子である。電気は初めは五〇万ボルトという超高圧で、家庭の電気は一〇〇ボルトであるから、要所要所の変電所で電圧を下げるわけであるが、ここにある変圧器にも碍子が使われている。日本碍子はあまり世間には知られていないが、この世界ではトップメーカーで、その当時は全世界で1、2を争うシェアを占めていた。

私は入社後一年半ほどして、この日本碍子の経理課で原価改訂の仕事を任されることになった。簡単にいうと、ひとつの製品の値段をいくらにするかという基準を作る仕事である。碍子は焼き物であるから、陶土を混ぜて素地を作るところから始まり、形に仕上げ、これを釜で焼いて、金具をつけるといような工程がある。送電線を吊す懸垂碍子というのは、それこそ何十万個、何百万個という大量生産であるが、変圧器につける碍子は器械ごとに設計が異なるので、これは注文生産である。それぞれ大きさや形が違うのでいろいろな成型方法やいろいろな焼き方がある、本社工場だけでも五つくらいの課に一二、三の係があった。

品物の値段は、直接・間接的な原材料費、設備備品の減価償却費、光熱費、人件費や歩留まりなどをその工程ごとに計算して、総合的に決められてくるのであるが、原価改訂はどのような製品ならどの工程ではいくらになるかという基準を定める作業である。もちろんこれが販売価格のもとになるのであるが、実はこの原価は各工程の成本管理にも使われる。例えば直径五〇センチ、長さ二メートルくらいの碍子一本に必要な土を作るのに一〇〇〇円かかるかと計算して、これがその月には一〇〇〇本作られたとすると、製土課その月の生産高は一〇〇万円ということになる。しかしその月の実際を経費を集計してみると一一〇万円かかっていたとすると、一〇万円分の効率が悪かったということになり、現場ではどこにその原因があったのかを血眼になって究明することになる。

しかし実はその製品にかかる製土の費用はどうしても一一〇〇円かかるとすれば、それは原価の付け方が間違っていたのであるから、一〇万円分の損はもちろん原価改定の担当者の責任である。だから原価改定がなされて、それによって予定価格による生産額と実際を経費がでる最初の月は、原価改定の担当者は生きた心地がしないものすごい重圧感を感じなければならないことになる。

このような原価改定は製土課だけではなく、すべての工程についてなされるのであるから、この作業は会社のすべてを知悉していなければならない。もちろん原価改訂は三年に一度くらいのペースでやるわけであるから、そのノウハウやデータは蓄積されているのであるが、その頃は生産合理化運動なるものが盛んで、技術が革新されれば、新たにデータを一から作り直さなければならないという場合もあって、ストップウオッチを持って電動車の後ろに乗り、ある地点からある地点までどれくらいかかるか計るなどということもした。

したがってこの原価改定の仕事は、それこそ会社全体を視野に入れて、何よりも現実にかかる費用や手間があるがままに把握することが基礎になる。そしてそれを標準化することが原価改訂なのであるから、特殊は排除されな

ければならない。その結果が毎月毎月、予定原価と実際にかかった費用とが対比され、検証されるのであるから恐ろしいといえば恐ろしい世界であって、その厳密性は学問の世界の比ではない。

おそらくこのような考え方が自然と私の身につけてしまったのであろう。私の研究という研究のすべては、できるだけ多くのあるがままの資料を集めて、その中に含まれる標準的なものを探るというものになった。

しかしこのような神経をすり減らすような仕事がたつて十二指腸潰瘍を患い、三ヶ月の入院をしなければならなくなった。そしてこの時にいろいろな本を読んで、仏教を学びたいという気持ちをもだし難くなった。最大の理由は会社の仕事に生き甲斐を見つけられなかったからであるが、あるいは真宗の信心に篤かった祖母から受けた幼少年期の体験も伏線となつていであろう。何しろ遊び盛りの子供が毎日夕方になると家に引き戻らされて仏壇の前に坐らされたのである。

とにかく回り道に見える日本碍子時代の五年間は、私の誇りうる人生の一コマであって、私の仏教学の土台はここで築かれたと思つてゐる。

## 大学で学んだことなど

こうして私は東洋大学の仏教学科に入学することになった。そのころは評論家的な仕事で口に糊していなければいなという夢想を抱いてはいたけれども、私には扶養すべき責任を持たなければならぬ者はないのだから、野垂れ死にを覚悟すればよいことだという気持ちが強かった。そもそも私には何やら難しい文献を原語で読んでみたいとか、誰も知らないことを知りたいなどという知識欲はなかった。悔いのない人生を送るために、仏教の人生

観世界観を学んでみたいという青臭い動機があったのみである。はなからプロの仏教学者のタイプではなかったというべきであらう。

こういふいきさつで東洋大学に入つて最初に指導を受けたのが田村芳朗先生であつた。そのころは担任制度というものがあつて、我々の担任になつて下さつたのが先生だったのである。私の一二、三人いた同級生はほとんどがなまくさ坊主の卵で、一年生の時からよく飲み会をやつたが、先生もよく付き合つて下さつた。詳しくは書かないが、一昨年度のこの紀要（第五八集）の菅沼晃先生の最終講義「東洋大学と私の研究」のなかに述べられている「事件」はこのころのことである。そして卒業後もこの飲み会は「クラス会」という名にかわつて、現在まではほほ年に一回のペースで続いている。先生は平成元年の三月二〇日に亡くなられて、さすがにその前年のクラス会には欠席されたが、それまでは皆勤であつた。先生の鎌倉のお宅で開かせていただいたこともあり、遠くからの同級生はお宅に泊めていただいた。

先生もお寺の出ではなく、よく私の青臭い議論にもつきあつて下さつた。というよりもむしろ先生の方からの問題提起だつたような気がする。私が学部を卒業するときに、寺に入るつもりであることを告げたと、それはいつでもできることだから、今は大学院に入つて勉強してはと勧めて下さつたのも先生である。それが今につながつているのであるから田村先生への思いは一入である。

そして私の学問の方法論に印可を与えて下さつたのは西義雄先生である。私が大学院を満期退学して助手をやつていたころまで、学会で研究発表をする前には必ず先生のお宅をお訪ねして、先生の印可を受けてから発表していた。先生の主著である『原始仏教に於ける般若の研究』も、私の仏教学に確かな影響を与えて下さつていると強く感じる。

そのころからずっと西先生のお導きで大倉精神文化研究所にお世話になった。この研究所の創設者は大倉邦彦という方で、大倉文二という人の養子になり、後に大倉洋紙店の社長となってから、私財をなげうってこの研究所を作ったのである。ところでこの文二という方の養父が大倉孫兵衛という人で大倉洋紙店の創業者であるが、今はノリタケという名になっている日本陶器という会社の創業にもかかわり、碍子もここで製造していたのである。後に独立して日本碍子となったのであるが、その初代社長がその息子の大倉和親という人であるから、日本碍子と大倉精神文化研究所は密接な関係にあったということを後になってから知った。

しかもこの大倉邦彦という方は昭和一二年七月から昭和一八年の七月まで、二期六年にわたって財政難に苦しんでいた東洋大学の学長を務められ、大学を建て直された中興の祖ともいべき人である。そういう意味では日本碍子は東洋大学とも因縁を持っていたのであって、私はそうした因縁の中で育てられたということになる。

そしてもう一つ言い漏らしてならないのは、私が今「釈尊伝の研究」でお世話になっている中央学術研究所と兄弟関係にある庭野平和財団である。平和研究などというものには全く関係がなかった私をこの財団の研究員にしていただったので、苦し紛れにサンガの紛争解決方法を調べてみようと思ったのが「律蔵研究」であって、これが今の研究に直接につながっているのである。

他人の評価はともかくとして、学者としてまがりなりにも独自の道を進んでこられたのは、幸いにもこんな具合に、私が学者としての普通の道を行ってこなかったということと、権威にはつい反抗したくなる反骨の精神があったからではないかと思う。

## 終わりに

こうしていよいよ退職を迎えることになった。有余曲折があつたにもかからわず、数えてみると勤続年数はちようど三〇年に達する。

その間つねに学生諸君、特に新入生諸君に言つてきたことは、「疑え、これが大学での教育・研究の基本である」「今までの学説にとらわれていては地動説も進化説論も生まれなかつた」「授業で先生が言うこと、書物に書いてあることを頭から信じるな、自分で確認してみよ」ということである。自分の学説が正しくて、他の学説は誤つていてという信念がなければ学者はやつていられないが、しかしそれを押し付けてはならない、方法論を強要するのは罪とさえいえるという気持ちで、教育にあたつてきた。学生諸君が自分の力で自分の世界を切り開いていってほしいということであるが、最近の教育の現場は教師の情熱を奪うことがあまりにも多すぎて残念である。

私はまだ発展途上にあると思つている。「釈尊伝の研究」もマラソンでいえば三〇キロを過ぎたところで、ゴールに到達するためにはこれから勝負である。気を引き締めていきたいと思うので、同僚や学生諸君には暖かく見守ってほしい。

東洋大学には長い間お世話になり、その間にはいろいろなことがあつた。それらのことについては改めて稿を起す機会もあるであらう。とりあえずは衷心から感謝の意を表させていただきます。ありがとうございました。